

高尿酸血症・痛風におけるCKD の頻度

両国東口クリニック

大山博司

大山恵子

諸見里仁

帝京大学医学部内科

藤森新

目的

- 高尿酸血症・痛風と腎障害は古くから指摘されているが、その関係は明らかではない。
- 尿酸クリアランス (Cua) とクレアチニンクリアランス (Ccr) を実施した1654例の高尿酸血症・痛風患者における病型とCKDの合併率について検討した。

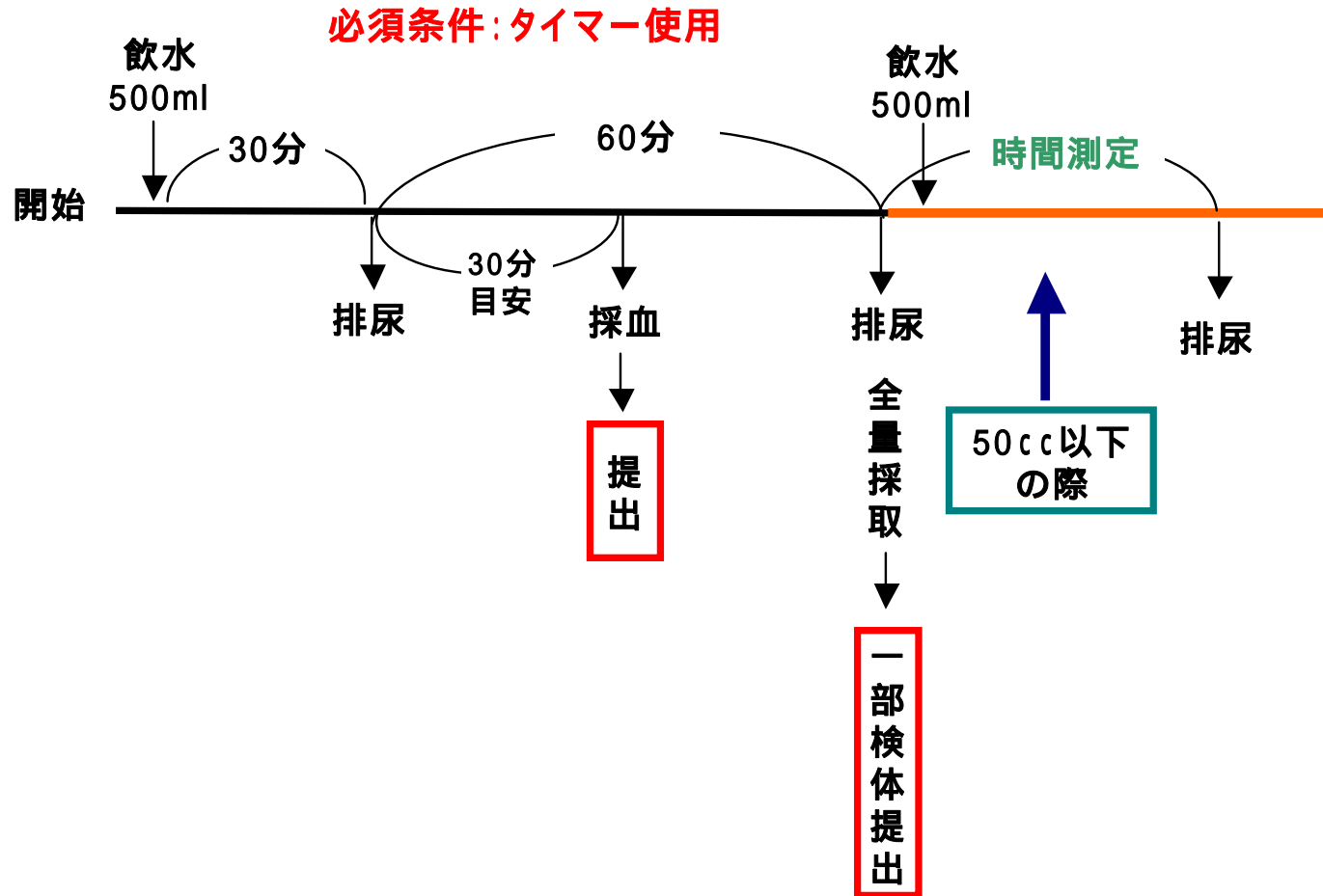
対象

- 2002年11月から2007年7月まで当院を受診した高尿酸血症・痛風患者のうちCua、Ccr検査を実施して登録した1654例を対象とした。
- 男性1613例(44 ± 10.2歳)、女性41例(38.9 ± 10.2歳)
- 痛風1319例(79.7%)、高尿酸血症323例(19.5%)

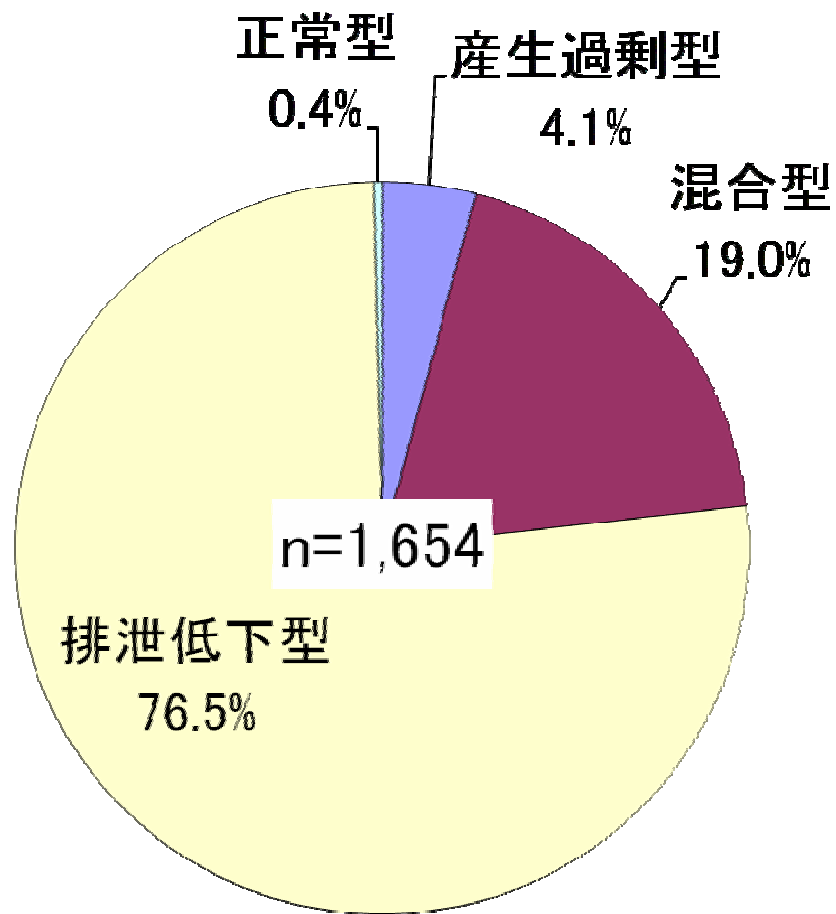
方法

- 1時間法クリアランスは次のごとく施行した。
- 高尿酸血症の病型分類は「高尿酸血症・痛風の治療ガイドライン第1版」に従って、排泄低下型 ($C_{ua} < 6.2\text{ml/分}$)、産生過剰型 (尿酸排泄量 $> 0.51\text{mg/kg/時}$)、混合型 ($C_{ua} < 6.2\text{ml/分}$ かつ尿酸排泄量 $> 0.51\text{mg/kg/時}$) に分類した。

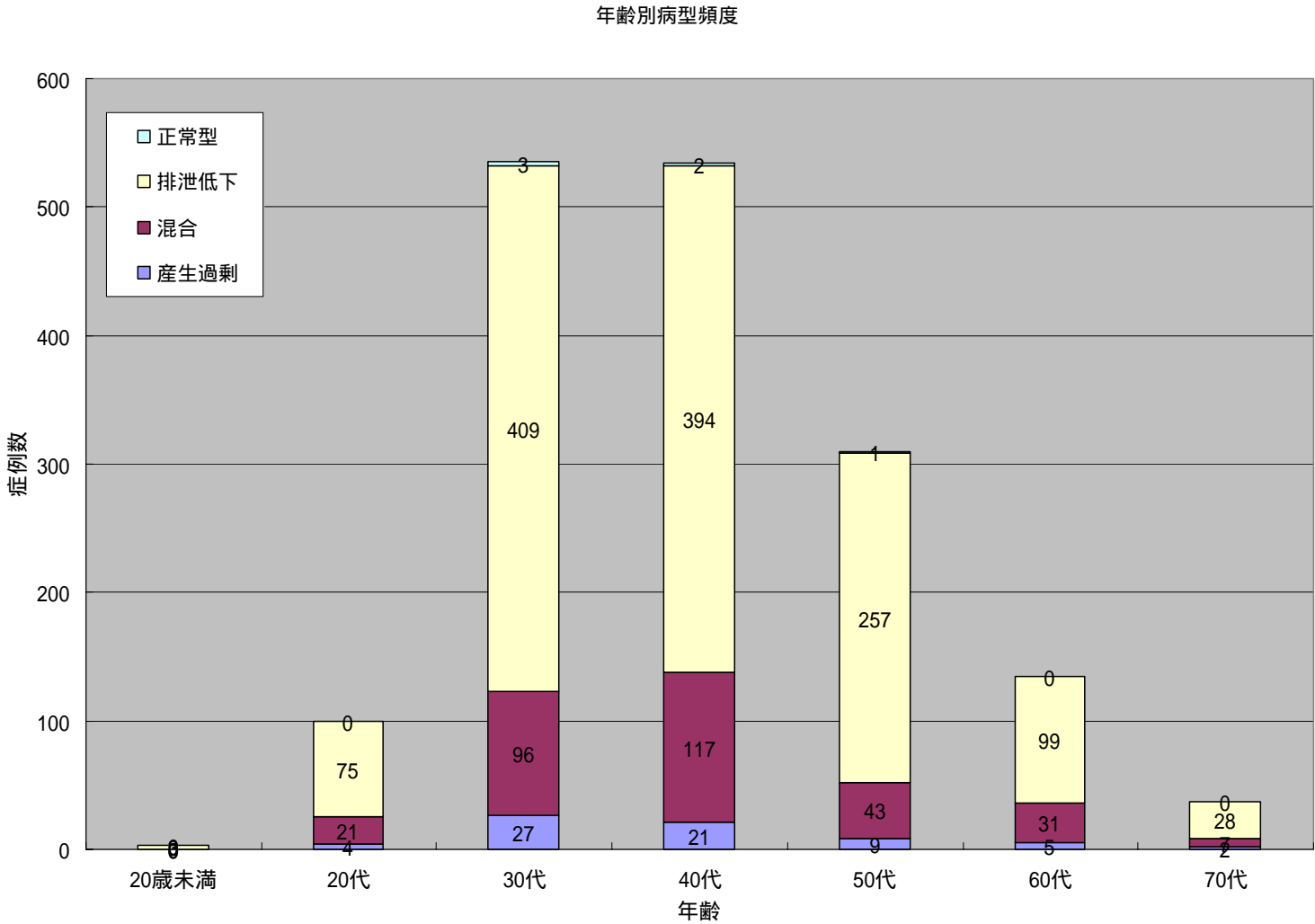
1時間法クリアランス検査



高尿酸血症病型分類

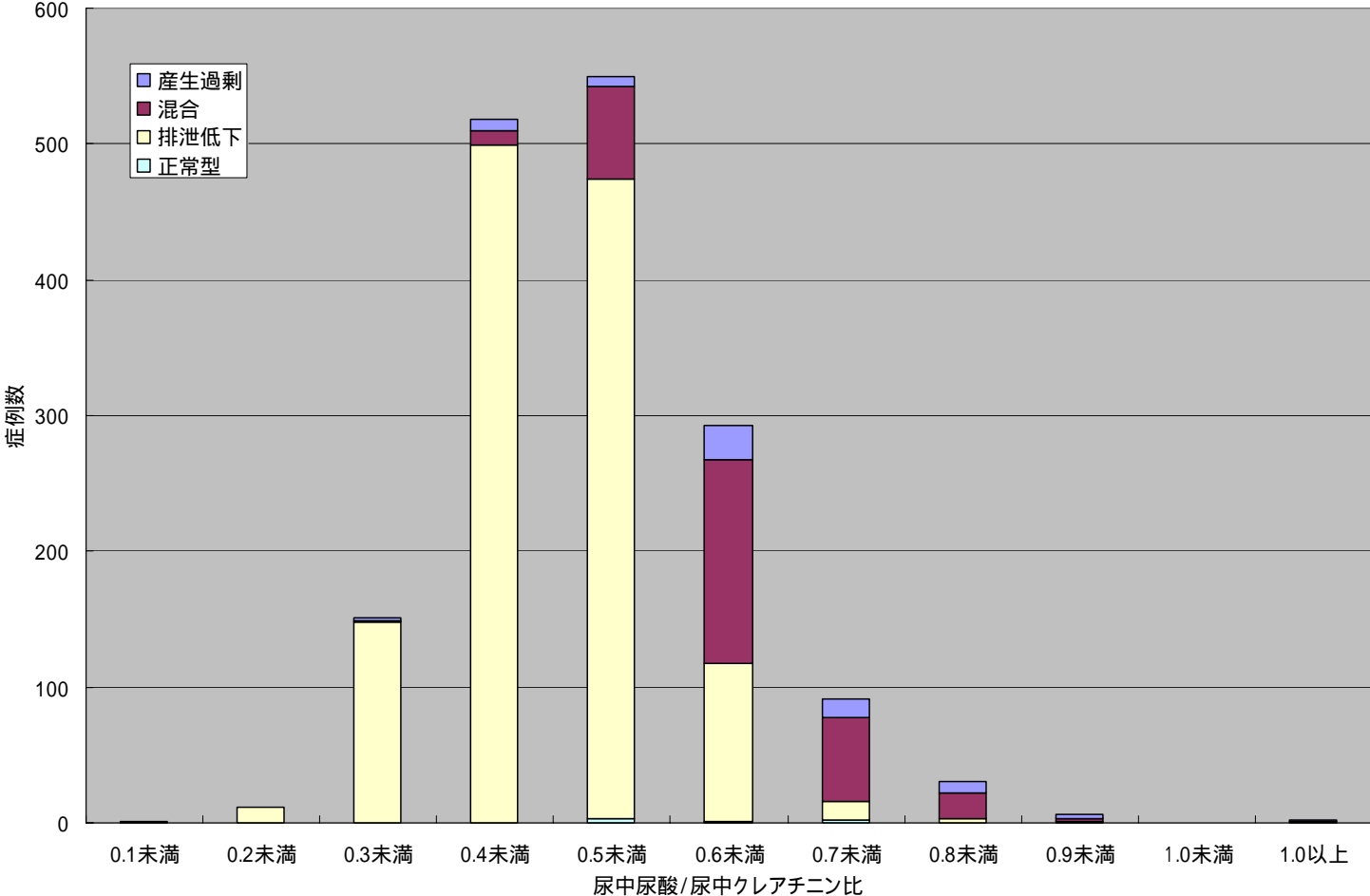


年齡別病型頻度



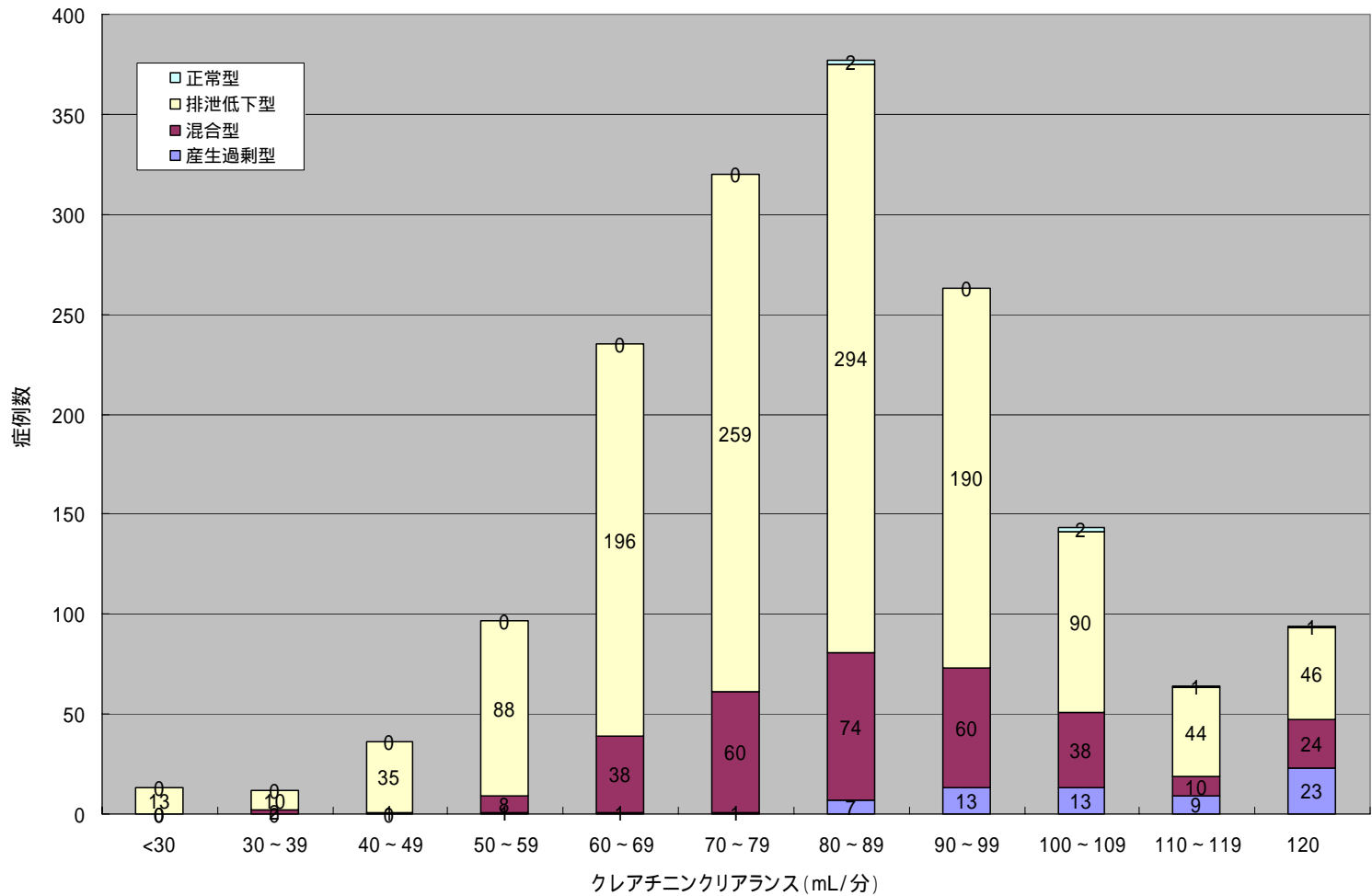
尿中尿酸/クレアチニン比による病型頻度

60分法と簡便法

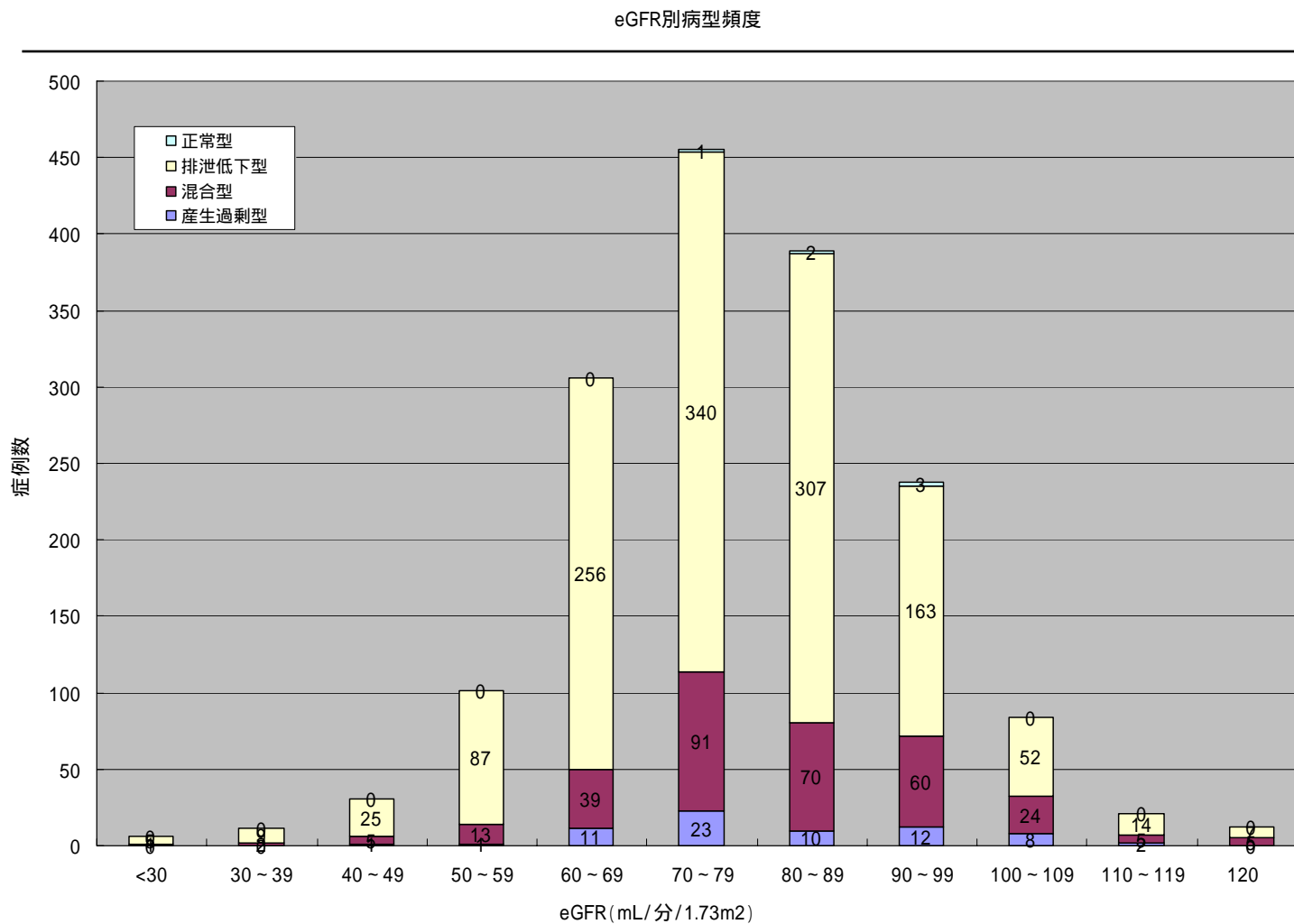


クレアチンクリアランス別病型頻度

クレアチンクリアランス別病型頻度



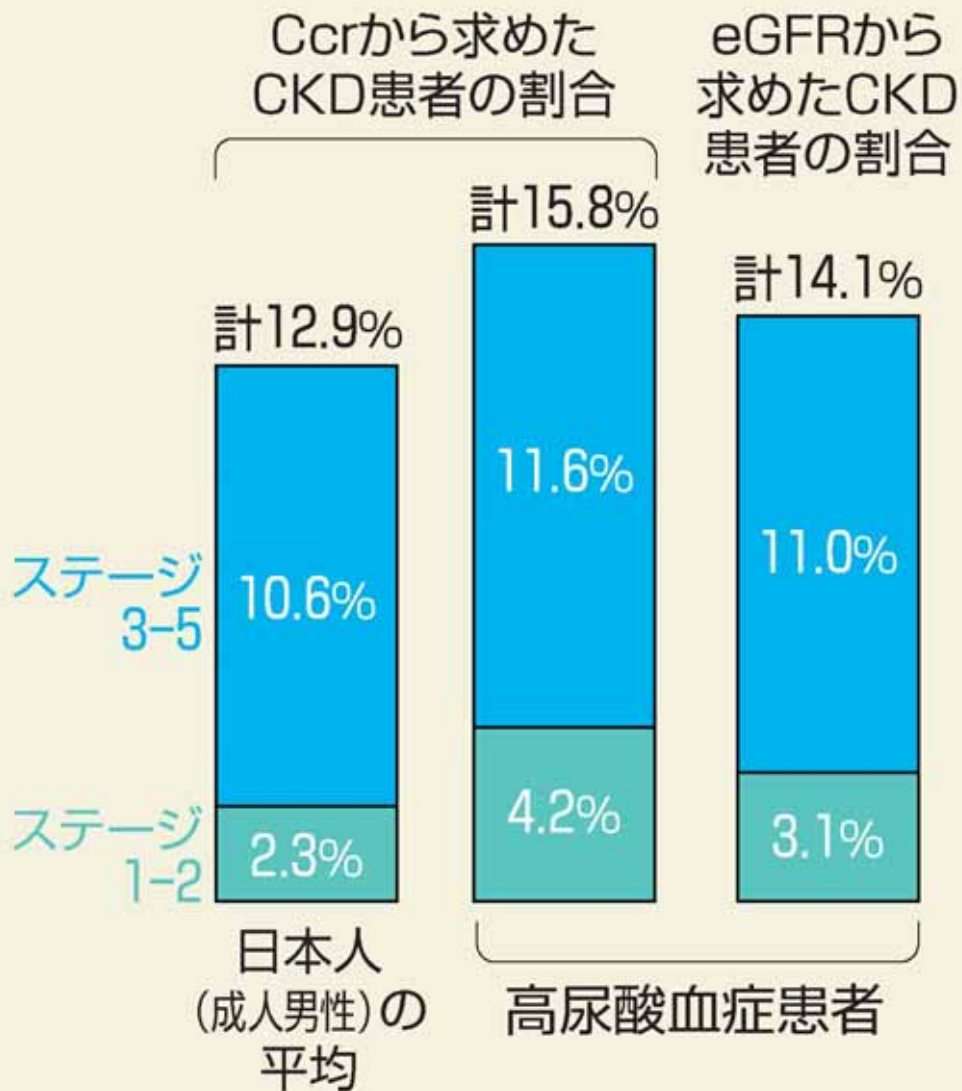
eGFR別病型頻度



CKDステージ別CcrとeGFRの相関

	n	eGFR	Ccr	Ccr/eGFR
stage1(90)	339	99.0 ± 8.7	100.8 ± 47.8	1.02 ± 0.39
stage2(60 < 90)	1153	75.7 ± 7.9	84.2 ± 21.8	1.12 ± 0.29
stage3(30 < 60)	155	52.4 ± 6.8	60.0 ± 15.9	1.14 ± 0.27
stage4(15 < 30)	7	22.5 ± 4.6	30.5 ± 12.4	1.36 ± 0.48
stage5(< 15)	0	0	0	0
全体	1654	78.1 ± 15.2	85.1 ± 30.7	1.10 ± 0.31

図 高尿酸血症でCKDを合併している割合



両国東口クリニックの来院患者データより

結果

- 高尿酸血症病型分類は、排泄低下型76.5%、産生過剰型4.1%、混合型19.0%であり排泄低下型が高頻度であった。
- 産生過剰型は、Ccr正常域でCcr値に依存して頻度が高まる傾向にあった。
- Uur/Ucr0.5未満で排泄低下型が著明に増加した。
- eGFRとCcrは、正の相関関係($r=0.48$)を示したが、僅かにCcrの方が高く、この傾向はeGFRが低いほど顕著であった。
- CKDstage3以上が、Ccr分類で9.7%、eGFR分類で9.8%の頻度で認められた。
- CKDstage3以上では、Ccr分類で92.4%、eGFR分類で85.8%が排泄低下型であった。

考察

- 高尿酸血症・痛風1654例中Ccr60ml/min未満(CKDstage3以上)を9.7%の頻度で認めた。
- 蛋白尿陽性例を加えたCKDの割合は、Ccrを用いた場合、stage1,2が4.2%、stage3以上が11.6%となり合計15.8%であった。
- 日本人成人男性におけるCKDの頻度は12.9%であり、高尿酸血症・痛風患者では、CKDの合併が多いことが示唆された。